

『INVISIBLE RISK 1』

著: 崎谷はるひ

ill: 鈴倉 温

「なんか、今日、機嫌いいね」

汐野もそう感じているのか、くすぐったいような淡い声で、そんなことを話しかけてくる。

「そうかな、と言えば、そうだよ、と小さく苦笑した。」

「なんてね、俺も人のこと言えないけどね」

コーヒーを啜りながら、ぽつんと伏し目がちに呟く。その言葉に顔を上げれば、静かな眼差しがこちらを見つめている。

「おまえも、今日は機嫌いいよな」

軽く言うつもりという言葉に、含みが過ぎた気がして、杉本は少し声をつまらせる。

じっと見つめるきれいな瞳には、曇りもためらいもない。ただなにごとかを訴えかけるような、真摯な強さがある、杉本は静かに息を呑む。

ためらうような仕草で、やわらかな唇が幾度か、開いては閉じる動作を繰り返した。

「天気、いいしね」

だが、結局彼の唇から届いたのはそんなさもない言葉で、言いかけた言葉を無理に呑みこむような表情を浮かべた。

「…」

無言のままの杉本と目が合った瞬間に、ふっとそれを笑みに紛らせ、汐野はまた目を伏せる。

拒絶のそれとは違う、甘さの残るぎこちなさに、杉本の胸は不意に高鳴った。

なにか言葉をかけようとして逡巡し、結局うまい言葉を見つけるのには失敗して、ただ熱っぽい息だけが自分の唇からこぼれていく。

「言ってしまうか。」

「訊いてしまえばいいのか。」

(どうして、おまえは、俺を拒まない?)

指を伸ばしても、唇に触れても。

(なぜいつも、なにも言わずに許すんだ)

バンドの人間関係をこじらせたくないだけかと、疑ったこともあったけれど、汐野の気位の高さを知っている以上、そんなさもない考えは打ち消さざるを得ない。

ならば、いったい彼はなにを考えて、この腕に身体を預けるのだろう。夜毎に甘く肌を震わせながら、それでもどこか遠いまま。

哀しげに、泣くのを堪える瞳で責める、そのくせに強情に引き結ばれた唇を、いまなら解いてしまえるのか。

好きだと告げて、抱き締めたなら、もしかして受け入れてくれるかもしれない。

(——勝手な……)

あさはかな期待が膨らみすぎて、喉の奥にものが詰まったような、嫌な感覚を覚えた。苦さを呑みこみ、唇を噛んで、杉本も視線を落としてしまう。

身体から迸ってしまいそうなその告白が、彼に触れ、幾度も泣かせたいまとなっては、なんだか言い訳じみて感じるのはなぜだろう。

一生言わないとかつて誓った自分の心にこそ、縛られているのは薄々感じてもある。

横目に見やった汐野の表情は、なにを考えているのかを読み取れないまでも、あくまでもやわらかで穏やかだ。

ずるいことかもしれないけれど、いまのこの空気を壊してしまうのが、杉本には恐かった。

「その小説、推理ものかなんか？」

「!?」

だから、不意にかけられた声に、過剰なほど肩を揺らしてしまう。

「なんだよ、そんなに驚くなよ」

大げさだな、と目を丸くする彼に、ぎこちなく、悪い、と謝った。

「時代物だけど……なんでだ？」

問いかけた内容に、気まずさをごまかすような空咳のあと答えれば、ひっそりと汐野は苦笑する。

「むつかしい顔して読んでるからさ」

「そう、か？」

「うん | | | そう、ここんどこ、しわがよってる」

自分の眉根を華奢な指で差し、小さな声を立てて笑った汐野は、しかしすぐにそれを解いて、真顔で杉本を見つめてくる。

そのあとに続いた、密やかな声の言葉に、杉本は鋭いもので身体を突き抜かれたような気がした。

「俺と寝るときも、そんな顔、してる」

「そ」

なんとも答えられずに、大きく胸を喘がせた杉本に、汐野は昏い笑みを見せた。

「そんなにしんどいなら、よせばいいのになって……思う」

頬杖をついて、煙草を引き寄せる彼を、声もなく杉本は見つめている。

汐野の吸う、きつめの煙草の香りが部屋に漂った。どこかけだるいような仕草で、フィルターを口に挟んだまま、汐野はしばらく無言のままだった。

不意打ちのその言葉に、責められているような胸苦しさに襲われた杉本は、唇を噛んで視線をそらす。嫌な緊張感が張り詰める中、汐野は小さな声で問いかけてきた。

「なあ、なんで……？」

その声になぜ、好きだからと言えないのか。

「なにが」

どうしてこんなに恐くて、声がかすれてしまうんだろう。

情けない自分を見られたくなくて、目元を手のひらで覆う。

ぐちゃぐちゃになるほど惚れ切っているのに、切なさがあふれてしまいそうなのに、臆病な言葉は喉にしがみついて出てこない。

決定打を出されるのが怖いからだ。

本気で好きだと言ってしまうえば、もう誤魔化しようもなくなる。うやむやでも曖昧でもいいから、汐野の体温を感じられる距離をなくしたくないからだ。

遊びであんなふうに触れることを、許す汐野ではないことくらい、知り抜いているは

ずなのに、そのことに自惚れも、まして自信などなにひとつ持てない。

汐野が自分を好きでいるなんて、そんな手前勝手な思いこみもないだろう。

だからわからない。

わからないから、恐くて仕方がない。

そして苦い沈黙だけが、重く押ししかかってくるのだ。

「なんで、黙っちゃうんだよ」

うつむいてしまった杉本の肩に、暖かい手のひらが触れた。

「どうしていいのかわかんないよ」

(俺だってわからない……！)

目元を覆い隠す自分の手のひらを、そっと外される。驚くほど近くにある小作りできれいな顔は、杉本を責めてはいないけれど、やはりどこか哀しそうだった。

「なんでいつも、泣きそうな顔してんの？」

歪んだ目元に、繊細な指が触れる。いたわるような優しさで、そっと撫でて去っていく。

泣きだしそうなのは、汐野の方じゃないかと思って、けれどそれを口にするのはやめた。

そんなことを言えば、彼は本当に泣いてしまいそうだったから。

そっと引き寄せ、ずるいとは知りながら、少し尖った唇にキスをした。

真夜中にかわす、気の急くような濃密なそれとは違う、ただ胸の痛むような、乾いた口付けを、汐野は受け入れてくれる。

「どうして」

触れ合った唇を切なげに震わせて、吐息した汐野の次の言葉は、しかし、杉本には意味がわからなかった。

「どうして、いつも……最後まで、しないんだ……？」

「—え？」

掴みあぐねた言葉を、問い返そうと視線を上げれば、きよんとした杉本の表情に、彼はさっと顔を赤らめた。

「……っ、なんでも、ない！」

首筋まで血の色に染めて、汐野がきつく首筋に腕を絡めてくる。聞かなかったことにしろ、と幾分怒ったような早口で、彼は言った。

(最後って……どういう……)

「汐野、それ」

「なんでもない……いいったら！」

引き剥がそうとして、耳元で怒鳴った汐野の声が潤んでいるのに気がついた。

肉の薄い背中を抱き締めれば、さらにきつく抱きついてくる。

「答えたくなければ、それでいいから…！」

もっときつく戒められることを望んでいるのだと、訴えてくる涙声に胸が詰まる。

すがるような力を、それでも少しだけ緩めさせれば、真っ赤になった瞳を悔しそうに歪めている。

「泣くなよ」

「誰も泣いてねえだろ……っ」

なめらかな頬を指先で撫でると、いまにもこぼれそうに瞳が潤む。

「じゃあ、そんな顔、するな」

困り果ててそう囁けば、きつと上目に睨み上げてくる。
「だったら、アンタもすんなっ！ ……見てるほうが、しんどいんだって……わかるだろっ」
「ああ」
ごめん、と呟きながらただ切なくて、また、きつく胸に閉じこめる。指先がいやに痺れて、こごる息を震えながら吐き出した。
背中に回った汐野の腕が、胸の痛みに拍車をかける。
互いの心音を感じられる距離で、切なさを伝えあうように、このままずっと抱き締めていたかった。
けれど | | |。
「誰か、来る」
胸元でひっそりと呟いた汐野の言葉に、杉本は落胆のため息をつく。
汐野の言うとおりに、外からは軽い足音が聞こえてきて、この部屋の前でぴたりと止まった。
インターホンなどないこの部屋に、軽いノックの音が響く。そのリズムがなぜだか、杉本の胸に嫌な影を差した。
「出たら？」
そっと胸を押し返す汐野の甘い体温が離れていって、杉本は知らず、眉根を寄せる。
そして、荒いため息をつくまま、重い腰を上げる。また響いたノックに、どこか聞き覚えがあると感じながらドアを開き――。
「はい、どちら……さ……ま」
喉奥に、誰何の声は凍り付く。
見下ろした、ゆるやかなウェーブの長い黒髪。
まろやかなラインの胸元を、強調するような深いカットの襟元。
「英莉」
数ヶ月前に、手酷く杉本を振ったはずの彼女が、そこに立っていた。

本文 p220～228 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>